

[D年] 聖霊降臨節第11主日(2020年8月9日)**【旧約聖書日課】 箴言 9章1～11節**

- 1 知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた。
 2 獣を屠り、酒を調合し、食卓を整え
 3 はしためを町の高い所に遣わして
 呼びかけさせた。
 4 「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」
 意志の弱い者にはこう言った。
 5 「わたしのパンを食べ
 わたしが調合した酒を飲むがよい
 6 浅はかさを捨て、命を得るために
 分別の道を進むために。」
 7 不遜な者を諭しても侮られるだけだ。
 神に逆らう者を戒めても自分が傷を負うだけだ。
 8 不遜な者を叱るな、彼はあなたを憎むであろう。
 知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
 9 知恵ある人に与えれば、彼は知恵を増す。
 神に従う人に知恵を与えれば、彼は説得力を増す。
 10 主を畏れることは知恵の初め
 聖なる方を知ることは分別の初め。
 11 わたしによって、あなたの命の日々も
 その年月も増す。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 11章23～29節**

²³わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、²⁴感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。²⁵また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。²⁶だから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

²⁷従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。²⁸だれでも、自分をよく確かめなうで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。²⁹主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 6章41～59節

⁴¹ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことでつぶやき始め、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。⁴⁶父を見た者は一人もない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷はつきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたたちの先祖は荒野野でマンナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。⁵³イエスは言われた。「はつきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。⁵⁴わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁵⁵わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。⁵⁶わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。⁵⁷生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。⁵⁸これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

箴言 9章1～11節

- 1 知恵は自ら家を建て
七本の柱を刻んだ。
- 2 いけにえを屠り、ぶどう酒を調合し
さらに食卓を整え
- 3 若い娘たちを町の高き所に遣わして
呼びかけさせた。
- 4 「思慮なき者は誰でもこちらに来なさい。」
浅はかな者にはこう言った。
- 5 「来て私のパンを食べ
私が調合したぶどう酒を飲むがよい
- 6 思慮のない業を捨て、生きよ。
分別の道を進み行け。」
- 7 嘲る者を諭す者は屈辱を受け
悪しき者を懲らしめる者は自ら傷を受ける。
- 8 嘲る者を懲らしめるな、彼に憎まれないために。
知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
- 9 知恵ある人に与えよ、彼は知恵をさらに得る。
正しき人に知らせよ、彼は判断力を加える。
- 10 主を畏れることは知恵の初め
聖なる方を知ることが分別。
- 11 私によって、あなたの日は増し
あなたの命の歳月は加わる。

コリントの信徒への手紙一 11章23～29節

²³私があなたがたに伝えたことは、私自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、²⁴感謝の祈りを献げてそれを裂き、言われました。「これは、あなたがたのための私の体である。私の記念としてこのように行いなさい。」²⁵食事の後、杯も同じようにして言われました。「この杯は、私の血による新しい契約である。飲む度に、私の記念としてこれを行いなさい。」²⁶だから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲む度に、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

²⁷従って、ふさわしくないしかたで、主のパンを食べ、主の杯を飲む者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。²⁸人は自分を吟味したうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。²⁹主の体をわきまえないで食べて飲む者は、自分に対する裁きを受けて飲むことになるのです。

ヨハネによる福音書 6章41～59節

⁴¹ユダヤ人たちは、イエスが「私は天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやいて、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『私は天から降って来た』などと言うのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴私をお遣わしになった父が引き寄せてくださなければ、誰も私のもとに来ることはできない。私はその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に、『彼らは皆、神に教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、私のもとに来る。⁴⁶父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷よくよく言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸私は命のパンである。⁴⁹あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹私は、天から降って来た生けるパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。私が与えるパンは、世を生かすために与える私の肉である。」

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に与えて食べさせることができるのか」と言って、互いに議論し合った。⁵³イエスは言われた。「よくよく言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。⁵⁴私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。⁵⁵私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物だからである。⁵⁶私の肉を食べ、私の血を飲む者は、私の内にとどまり、私もまたその人の内にとどまる。⁵⁷生ける父が私をお遣わしになり、私が父によって生きるように、私を食べる者も私によって生きる。⁵⁸これは天から降って来たパンである。先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・8月9日「聖霊降臨節第11主日」の日課主題は、「聖餐」。福音書日課が三週にわたってヨハネ福音書6章「パンの章」から取り上げられるのに合わせて、「パン」を鍵語とした日課が三週にわたって定められてきた。三週目のこの主日に使徒書日課として定められているのが、いわゆる「聖餐制定語」と呼ばれる、使徒パウロの伝える「聖餐制定」伝承である。

・「聖餐」の起源については、主イエスによる直接的な制定のほか、旧約の中に儀式的起源や象徴的起源が見いだされる。旧約でパンを用いた儀式として中心に位置するのは、「過越のパン」(出エジプト12章)である。「過越」の儀式自体は、「パン」よりも「羊」の犠牲が大きな位置を占めているが、「種入れぬパン」を用いる儀式的食事は、「災いの過ぎ越し」に続いて起こった「解放」を象徴しており、ユダヤ教共同体で「過越の羊」を規定通りに屠ることができなくなった時代にも「過越の食事」の中心を占めてきた。一方、「パン」そのものを神との関係の中で強力に位置づけるという意味では、「マナの出来事」(出エジプト16章)を無視できない。さらに、幕屋(神殿)で祭司によって営まれる諸儀式の中に、犠牲獣奉獻とは別に、「ぶどう酒の献げ物」と「供えのパン」をささげる「机」に関する規定がある(出エジプト25:23~30)。これらが、古代教会で「聖餐」を儀式・典礼化していくに際して、複雑に影響を及ぼしたものと推察される。

・主イエスの公生涯伝承の中に、パンや食事に関する逸話は少なくない。「聖餐」に直接関連すると考えられてきたのは、「五千人(四千人)のパンの出来事」と「最後の晩餐」であるが、それ以外にも食事の場面を象徴的に伝える逸話は少なくない。

・初代教会は、早い段階で「パン裂き」と呼ばれる営みを始めていた(使徒2章)。また、今回の使徒書日課(1コリント11章)前後でパウロが述べているように、「主の晩餐」と呼ばれる一定の儀式化された営みも早い段階で広く営まれていたことが確認できるが、この日課箇所が示すのは、その儀式的な営みがいまだ定式として完成・共有されていなかったという事実である。実際、紀元60年前後に執筆された書簡(1コリント書)にパウロの伝える「制定語」定式が見られるにもかかわらず、紀元1世紀末から2世紀初頭にかけて著されたと推測される「十二使徒の教訓(=十二使徒を通して諸国民に与えられた主の教訓。通称「ディダケー」)」は古代教会で広く流布していた重要文書であり、教会の基礎的制度に広く言及しているが、「聖餐」に関する指示は、「僕ダビデの聖なるぶどうの木」を典拠とし、「五千人のパンの出来事」を象徴的出来事として位置づけるものであって、使徒パウロの「制定語」伝承にある「最後の晩餐」との関連は一切触れられていない(該当箇所については参考資料を見よ)。

旧約日課(箴言9章より)

・「箴言」は、「詩編」などと共に旧約正典中の「諸書」に含まれる格言集で、「コヘレトの言葉」や「雅歌」と共にソロモンに帰されているが、古代イスラエル社会の伝統に限定されず広く古代オリエント世界で共有されていた知恵者・知識階級の影響を広く受けていると考えられている。実際、多くの格言が、神信仰に立脚するのではなく、人々の社会生活から得られた合理的な経験則に基づいたものである。にもかかわらず、本書全体は、「主を畏れることは知恵の初め」(1:7、9:10)というテーゼ(定立)によって基礎づけられている。それによって、「知恵」の根源を神に帰すこと、そこから翻って「知恵」が一種の人格を有した存在としてたとえられることが、本書の特徴となっている。この神を根源とする「知恵」の人格化は、「言葉の受肉」という視点から「神が人となられたキリスト」を理解する上で、少なからず影響を与えたものと考えられる。

・日課箇所は、新共同訳では、6節までと7節以下に分けて解釈されている。しかし、日課箇所としてまとめて取り上げられるのにも、根拠がある。前半(~6節)は、神殿礼拝を土台とした神信仰への呼びかけであり、後半(7節~)は、神信仰に基づいた「知恵」の習得への招きであるが、そのように得られる「知恵」こそが神殿礼拝を建て上げている(1節)という循環論法が取られているのである。

・1節の「知恵」は、エルサレムの神殿建設を実行した「ソロモン王」を示唆する用例で、「箴言」中の他箇所の用例とは異なる(そもそも「知恵」を特定の意味に定義づけて用いているわけではなく、多義的に用いている)。「家」は、旧約では多くの場合、神殿などの宗教施設を指して用いられる。「七本の柱」は、典拠は不明だが、おそらくエルサレム神殿の構造上の柱を指す。神殿祭儀は、基本的にモーセ律法における幕屋祭儀に準ずるものと考えられる(レビ記など参照)。神殿祭儀の基本は犠牲獣の奉獻であるが、穀物やパンなどの奉獻が指示されている場合もある。また、これらの奉納物は、原則として、神に献げられた後に残った物を祭司とその家族が食べることでとされているが、「和解の献げ物」(レビ3章、7章を参照)の場合は奉納者(とその家族)が食べる。日課箇所2節以下は、この「和解の献げ物」を想起させる。

使徒書日課(1コリント11章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自ら開拓伝道して建設したコリント教会に宛てて記した一連の書簡の中の一つ。新約には、本書簡と「手紙二」が収められているが、おそらく他にも複数のコリント教会宛書簡があったと推察される。コリントは、アテネの南西約80キロほど、ギリシア本土とペロポネソス半島を結ぶ「コリントス地峡」に位置する港湾都市で、古来、地中海貿易のハブ港として栄えた商業地。パウロは、

コリント教会内部で起こっていた分断や不道德などの問題に助言を与えるために本書簡を執筆している。

・日課箇所は、いわゆる「聖餐制定」伝承を伝える箇所、教会の「聖餐」典礼で引用されてきた。パウロ自身が、これを「わたし自身、主から受けたもの」として伝えているのだと強調しているように、「聖餐制定」の根拠は他にもない主イエスにあると理解されている。この「聖餐制定」伝承は、「引き渡される夜」とあるとおり、「最後の晩餐」伝承に基づいているが、共観福音書の伝える「最後の晩餐」伝承は、それぞれ細部に差異がある。パウロの伝える伝承は、ルカ福音書の伝える伝承に近似している。

・27~28 節は、「聖餐制定」伝承に基づいてパウロが指示した教え。「ふさわしくないままで」を、聖書協会共同訳は「ふさわしくないしかたで」と訳している。これは、前後の文脈から見て、「聖餐」の「ふさわしさ」を問題にするパウロの意図が、信者個人の信仰上の「ふさわしさ」の問題ではなく、教会共同体の営みにおける「ふさわしさ」の問題にあるとの解釈に基づく。

福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの出来事」および「湖の出来事」の翌日に再び集まってきた人々を前に、主イエスが「パンの出来事のしるしの意味」を語ったことに対しての反発した人々の反応と、それにさらに応答した主イエスの言葉が、重ねて描かれている。

・ここでの問題は、「パン」が「マナ」と同じように神から与えられる「天からのパン」であったかどうかではなく、主イエスとその「パン」とご自身を同一視していることにある。つまり、「イエスを天からのパンとして食べる」とはどういう意味なのか、ということが問題とされている。ここで、ヨハネ福音書は、この箇所での主イエスの言葉に、すでにヨハネの教会で実践されていた「聖餐」の意味を投影させている。すなわち、ヨハネの教会の周辺で「聖餐」のパンを「主イエスの肉(体)」として食べるとはどういう意味なのか、ということで混乱や議論が生じていたことが、想像される。ヨハネ福音書は、教会の問題への答えを主イエスの御言葉に求めている。

参考資料

・「十二使徒の教訓」における「聖餐」に関する指示
聖餐については、次のように感謝しなさい。最初に杯について。「わたしたちの父よ。あなたがあなたの僕イエスを通してわたしたちに明らかにされた、あなたの僕ダビデの聖なるぶどうの木について、あなたに感謝します。あなたに栄光が永遠に(ありますように)。」パンについて。「わたしたちの父よ。あなたがあなたの僕イエスを通してわたしたちに明らかにされた生命と知識について、あなたに感謝します。あなたに栄光が永遠に(ありますように)。このパンが山々の上にまき散らされていたのが集められて一つとなるように、あなたの教会が地の果てからあなたの御国へと集められま

すように。栄光と力とはイエス・キリストによって永遠にあなたのものだからです。」主の名をもって洗礼を授けられた人たち以外は、誰もあなたがたの聖餐から食べたり飲んだりしてはならない。主がこの点についても、「聖なるものを犬に与えるな」と述べておられるからである。

〔「十二使徒の教訓」九。『使徒教父文書』(新井献編、講談社文芸文庫、1998年)所収、34頁〕

来週の誕生日 (8月9日~15日)

。

主日礼拝の讚美歌から

・21-553 番「キリストがわけられた」(☐22 番)は、Land of Rest の曲名で知られる米国の民謡曲に、聖餐/愛餐に用いるための詞を讚美歌委員会が付した。米国では、この曲に「O Land of Rest」他さまざまな歌詞が付けられた讚美歌がみられる。

・21-411 番「うたがい迷いの」(= I 385)は、19世紀デンマークの文学教授・文学者インゲマンが当時用いられていた聖書日課に基づいて待降節第2主日用に作詞。19世紀後半の英国教会司祭ベアリング=グールドの英訳詞によって英語圏で広く歌われるようになった。曲は、19世紀英国教会信徒の音楽教師バンブリッジが当時の英国皇太子の病氣回復を祝う式典のために作曲したものだが、近年の讚美歌集ではほとんど用いられていない。

21-411「うたがい迷いの」

logjennem Nat og Traengsel

English Translation by Sabine Baring-Gould

Through the night of doubt and sorrow

1. Through the night of doubt and sorrow, / onward goes the pilgrim band, / singing songs of expectation, / marching to the promised land. / Clear before us through the darkness / gleams and burns the guiding light; / pilgrim clasps the hand of pilgrim / stepping fearless through the night.
2. One the light of God's own presence / on the ransomed people shed, / chasing far the gloom and terror, / bright'ning all the path we tread. / One the object of our journey, / one the faith which never tires, / one the earnest looking forward, / one the hope our God inspires.
3. One the strain that lips of thousands / lift as from the heart of one; / one the conflict, one the peril, / one the march in God begun. / One the gladness of rejoicing / On the far eternal shore, / where the one almighty Father / reigns in love forevermore.
4. Onward, therefore, sisters, brothers; / onward, with the cross our aid. / Bear its shame, and fight its battle / till we rest beneath its shade. / Soon shall come the great awaking; / Soon the rending of the tomb! / Then the scatt'ring of all shadows, / and the end of toil and gloom.

(Evangelical Lutheran Worship #327)